

## 論文概要

# 北部九州弥生社会の研究

## 第1章 農耕集落の開始と展開—三国丘陵を中心として—

### 第1節 三国丘陵を取り巻く農耕開始期の研究と現状

本章では、大陸から伝えられた新しい農耕文化が、地域社会にどのように受け入れられ、根付いていったのかという問題を、筆者がフィールドとしてきた、筑紫平野北部三国丘陵の弥生時代集落遺跡を通して研究した。研究の最初に、本節では、この地域で今までに発掘調査が行われた100箇所以上の遺跡の概要とそれをもとにした先行研究をふりかえり、問題の所在を明確にした。

### 第2節 三国丘陵遺跡群の時期別変遷過程

縄文時代晩期から弥生時代中期初頭に営まれた、三国丘陵遺跡群に属す個々の遺跡を、時期別に整理し、その変遷をまとめた。縄文時代晩期までは、丘陵内にはほとんど集落がないが、弥生時代前期（板付I式期）に入ると、河川後背地に新たな集落が誕生する。その代表例として力武遺跡群の分析を行い、その遺跡を営んだ集団を、朝鮮半島からの渡来人系統の集団と考えた。その根拠として、高度な水田稲作技術を持ち、住居も従来にない松菊里型住居を作るなど、それまで三国丘陵にいた縄文系集団とは異なった生活様式を持った点をあげた。

食糧獲得手段が限定されていた縄文時代には、三国丘陵の人口も抑制されたが、新たに移住した集団は、水田稲作農耕や畑作農耕に適した、潜在的耕作地を次々に開発することによって、人口増加に対応した。分村造営は、潜在的耕作地である丘陵奥地に向かい、その分村の中には、かつての母村と同じように、その下に分村を生み出す準母村も出現し、これが、弥生時代前期の間に繰り返されて、急激な集落の増加がもたらされたと考えた。

### 第3節 三国丘陵集落の視覚的・景観的構造

丘陵奥地に進出した集落を食糧生産の面から支えたのは、谷間の水田稲作農耕だけでなく、最近の発掘調査で明らかになった畑作や陥穴（落し穴）による動物資源獲得など、多様な食糧獲得手段であった。

本節では、今までの調査では検出が難しかった畠（畑）を、弥生時代前期の三沢蓬ヶ浦遺跡の調査に基づいて再検討し、畠が、普通に各集落遺跡の住居の間隙に存在したと考え

た。一方、同時期の三沢公家隈遺跡では、三沢蓬ヶ浦遺跡に隣接する谷部の水田遺構を検出したが、谷水田は従来考えられていたよりも規模が小さく、水田稲作農耕に依存する割合がそれほど多いものではないと考えた。そこで水田と畠への食糧依存率は、同程度のもので、両者は、気候等の外的影響による収穫不足の危険を分散し、補完しあう生産母体であるという結論を得た。

さらに、弥生時代集落を取り巻く周囲の丘陵を調査した、三沢北中尾遺跡の例をあげて、住居群や周囲の生産遺構の周辺に広がる丘陵＝里山の土地利用を考えた。そこは、木材の供給源としてだけでなく、弥生時代にも陥穴などを作って、動物資源の獲得の場として役立て、集落経営に大きな役割を果たしていたと考えた。

#### 第4節 三国丘陵ムラ社会の構造

母村と分村を営むそれぞれの集団が内包する、さまざまな社会的関係について検討した。

母村を構成する集団のうち、一定の年齢幅に所属する人間集団（年齢階梯集団）が、分村や、その分村を含めた大きな地域を指導・支配する集団へ発展し、母村はその経済的優位を維持するために、母村が持つ生産地の確保と分村からの労働供与を受けたと考えた。北部九州では墳墓の調査によって、弥生時代前期に特定集団が、その他の集団に対して優位な立場を築くことが明らかになっている。従来は、首長権の確立を、集落維持のために卓越した能力を持つ個人の出現に求めることが多かったが、筆者は、母村と分村の関係を軸に生まれる、母村内部の年齢階梯集団の出現が、首長権確立の前段階にあると考えた。

#### 第5節 三国丘陵開発の再検討

甕棺遺存人骨をもとにした人類学的考察によれば、弥生時代前期から中期にかけての三国丘陵の人口増加率は年率約1%である。この数字は、日本史の中でもかなり高率であるが、その人口増加分のほとんどは、高顔・高身長の渡来系渡来人で、全人口の90%近くを占め、低顔・低身長の縄文人を圧倒している。渡来系弥生人だけが、このように高増加率を維持した理由を、考古学的に考察した。

筆者は、渡来系弥生人の集団が移住して集落を形成し、そこを起点に分村化を繰り返したために、渡来系弥生人の比率が増加したと考えた。もともと三国丘陵に存在した縄文系集落は少数であったが、弥生時代前期末まで、渡来系弥生人と地域的に接触する機会が少なく、棲み分けが行われて、基本的に増加がなかったと考えている。

最後に、環濠を通して、分村造営に母村がどのように関わったのかという問題を考えた。まず、弥生時代前期の環濠は、他集落との闘争を目的にしたものではないということを確認した。三国丘陵の例として、ひとつの谷に面して、隣接する丘陵に営まれた3箇所の環濠例を取り上げた。それらは、いずれも丘陵先端側に環濠が掘られ、環濠よりも丘陵側に住居が作られている。その配置は計画的である。環濠は深いもので4mあり、幅も最大で4mを測る。これだけの土木工事が環濠周囲の住居構成員だけでなしえたとは考えられな

い。母村やそれから分岐したいくつかの分村群との同族関係による労働供与がなければなしえない点を強調した。したがって、環濠を含めた分村造営は、母村とそれから同じように分岐した他の分村とを含めて、大きな集団の中で営まれたと考えた。

## 第2章 日本出土朝鮮系無文土器の研究

### 第1節 日本出土の朝鮮系無文土器概説

朝鮮系無文土器に対して、その概念を明確にした。すなわち、日本国内からは、朝鮮半島の無文土器と区別つかない形状と製作技術をもった土器が出土するが、こうした土器を「朝鮮系無文土器」と呼ぶ。また、朝鮮系無文土器そのものではないが、その影響を受けた土器を「擬朝鮮系無文土器」と呼ぶ。具体的な例としては、朝鮮系無文土器を作っていた集団が、世代を経て、弥生土器の影響を受けたものもあるし、弥生土器を製作していた集団が、朝鮮系無文土器の影響を受けてそれを模倣したものもある。それらの個々の資料を分類・整理した。

朝鮮系無文土器は弥生土器と共伴するため、日韓土器文化の並行関係を求める上で有効な考古学的資料である。朝鮮半島前期無文土器は日本の縄文時代晩期に、中期無文土器は縄文時代晩期後半～弥生時代前期前半に、後期無文土器は弥生時代前期後半～中期後半に並行することを明らかにした。

### 第2節 日本出土の孔列文土器

前期無文土器段階の孔列文土器は、日本国内の76遺跡で出土している。筆者はできる限り現物を観察して計測表を作成し、その分類や分布状況、時期別変遷の検討を行った。その結果、黒川式土器段階に内側から刺突する1類と刻目凸帯文に内側から貫通刺突する2類は、北部九州から東九州・山陰・瀬戸内に分布し、一方、黒川式土器以後に外側・両側から刺突する3類と、凸帯文土器に外側・両側から刺突・貫通する4類は南九州で分布して、大きな2つの系統のあることを明らかにした。

1・2類は、それぞれその地域で最初に水田稲作農耕が開始された遺跡と分布が重複する点から、出土遺跡周辺では、次の弥生時代前期に始まる水田稲作農耕文化に先駆けた大陸文化の受容体制が、すでにできた地域と考えた。また、南九州で孔列文土器が受け入れられる背景に、朝鮮半島畑作文化の影響を考える意見がある。現段階ではそれを証明する遺跡・遺物の発見はないが、南九州の分布密集地域は、確かにシラス台地の畑作地帯である。朝鮮半島畑作文化の中で生まれた孔列文土器文化が、日本の土器文化に影響を与える際、その孔列文土器文化の基層にある畑作文化が、日本の文化にどのような影響を与えたのかは、今後検討しなければならない重要課題である。

### 第3節 山陰の孔列文土器

山陰地方には、内側から半貫通の刺突を行い、表面にこぶ状の連続した隆起文を作る1類の孔列文土器が集中する。これらは朝鮮半島の孔列技術に近いもので、特に1節を設けて、当地に朝鮮半島と直接的交渉があった可能性を示すものとして注目した。

### 第4節 日本出土の松菊里型土器

中期無文土器段階の松菊里型土器を取り上げ、日本出土例の基礎的な集成作業をもとに分析に着手した。松菊里型土器がもたらされた、縄文時代晩期後半～弥生時代前期前半は、日本における水田稲作農耕とそれに伴う農耕文化が大陸から伝播する時期にあたる。そのため、出土したそれぞれの地域において、松菊里型土器出土遺跡が、その地域の水田稲作農耕の開始と深く関わっている点に注目した。

### 第5節 日本出土の後期無文土器

後期無文土器は、日本からの出土量も多く、それが提起するさまざまな問題は、次の第3章にまとめているが、本節では、後期朝鮮系無文土器の認定作業や分布・時期などを総括的に述べた。後期無文土器でも前半のものは、内陸奥深くまで入り込んでいて、そこでは朝鮮系無文土器が、弥生土器の影響を受けて変化する姿も見られる。このことから、まとまった数の渡来人の移住と定着を考えた。後期後半無文土器は、前半とは違って、日本と朝鮮半島をつなぐ海峡沿いに分布が見られ、出土量も限られていることから、小規模な交易や漁民の往来がそれらをもたらしたと考えた。

### 第6節 中・南九州の後期無文土器

北部九州から熊本方面へ南下した朝鮮系無文土器の動きを取り上げた。いままで、北部九州以南の地域では、朝鮮系無文土器の分析はほとんどなされていなかった。本論は九州西海岸沿いに北部九州から南下した熊本・鹿児島両県内の朝鮮系無文土器、およびその系統の擬朝鮮系無文土器の集成と分析を行い、それらの土器を携えた渡来系集団が、弥生時代前期末には、その地の在来弥生社会と一線を画しながら集落を形成しつつも、やがて中期に入ると、一部集落では、青銅器の生産を開始したり、土器が弥生土器化するなど、弥生社会に同化する動きが出てくる点について考察した。

## 第3章 渡来系集落の研究

### 第1節 渡来人の集落

朝鮮系無文土器・擬朝鮮系無文土器出土遺跡を出土する集落をいくつかのパターンに分類してその特徴を抽出した。出土遺跡には大きく2つの分布傾向がある。玄界灘沿岸部に点在する「島嶼分散タイプ」と北部九州内陸部に集中する「内陸集中タイプ」である。前

者は、主として一過性の渡来人が居住し、後者は長期に及ぶ滞在や永住する渡来人の居住を想定した。

内陸集中タイプの遺跡は、弥生時代前期末の限定された時間内に生活した後、再びいずこへか移動する「諸岡タイプ」と、移動することなく、最後までその地に定着して、ついには弥生人に同化する「土生タイプ」に細分類した。渡来系集落にもさまざまな姿があり、それらが地域や時代によって特徴をもつ点を述べた。

## 第2節 渡来文化の弥生化

佐賀県土生遺跡とその周辺では、多量の朝鮮系無文土器と、それが変化した擬朝鮮系無文土器の資料が特に充実している。弥生時代前期末から中期前葉にかけて、擬朝鮮系無文土器が、弥生土器との接触の中で変化する過程を土生Ⅰ～Ⅲ式に分類した。その時期、佐賀平野の地域社会は、地域集団が政治的連携を深めながら、平野単位のクニへと発展し、吉野ヶ里遺跡の墳丘墓に見られるように、特定有力集団の地域指導体制のもとに結束する動きが見られるが、そうした社会状況の中で、渡来系集落はその独自性を喪失し、日本弥生社会に同化していく。この変化を、朝鮮系無文土器が擬朝鮮系無文土器へ変化し、そして完全に弥生土器に同化する土器の形態変化と併せて考察した。

## 第3節 朝鮮半島へ渡った弥生人

朝鮮系無文土器とは逆に、朝鮮半島にも弥生土器系統の土器が出現する。弥生土器系土器は韓国南部に集中するが、その弥生土器系土器には、池内洞遺跡出土土器に代表されるような、日本から持ち込んだ土器と、福泉洞萊城遺跡出土土器に見られるような、弥生土器を模倣した土器がある。日本から持ち込んだ土器には、弥生時代前期末以後、海岸沿いや島嶼部の遺跡に現われるもので、小規模な交易や漁労によって運ばれた土器と、弥生時代中期後半以後に、北部九州のクニが総括する政治的・経済的交渉によって運ばれた土器がある。この土器は、特に金海地域に多く、この地域が日本との交渉において、弥生時代から重要な地域であったことを物語っている。また、弥生土器を模倣した土器は、中期初頭前後に日本からかなりの数の人間が半島に渡り、その集団の作る土器文化の影響が、現われたものと考えた。

形態の  
差は?

## 第4節 海峡を往来する人と土器

1993年以後、継続的な調査が進められる壱岐原の辻遺跡の西北部低地から多量に出土した擬朝鮮系無文土器を通して、日韓交渉を担った集団の存在を考察した。原の辻遺跡は台地が環濠に囲まれるが、その西北側低地は重要な遺構は検出されないと考えられてきた。しかし、その地域の発掘調査で、台地とはまったく違った様相で、多量の朝鮮系無文土器や擬朝鮮系無文土器が出土し、それらが弥生時代前期末から中期前葉に継続していることがわかった。さらにここでは船着場も発見されている。そうしたことから、筆者はここに

港市都市的な性格を求め、そこから出土する擬朝鮮系無文土器を持つ集団が、交渉の担い手になったと考えた。さらに、その擬朝鮮系無文土器と韓国福泉洞萊城遺跡や金海大成洞焼成遺跡等の資料とを比較して、韓国側にも同じ様式の土器が存在することを指摘し、日韓両地域を往来する航海民の存在を提起した。

## 第4章 青銅器文化の研究

### 第1節 青銅器生産概観

北部九州の青銅器文化について、その生産の初期から青銅器生産の終焉を迎える段階までの概要を述べた。その中でも、鑄型の再利用という問題は、今までに先行研究がないので、今後の研究の方向性を示す意味で、筆者の知りうる4例を上げて、大きな鑄型の破損品を小型青銅器の鑄型に転用した例と別の青銅器鑄型の一部として組み合わせて用いる部品に転用する例を紹介した。

### 第2節 青銅器生産の開始（有明海沿岸地域の青銅器生産開始）

弥生時代中期前半（I期）にさかのぼる初期の青銅器は、朝鮮半島からの舶載品が多くを占めていたが、その多くは北部九州の中でも、朝鮮半島に近い玄海灘沿岸部からの出土品である。I期には、北部九州の各所で青銅器鑄型が出土し、青銅器生産の国産化がうかがわれる。特に青銅器生産遺跡が、数多く発見される地域である筑紫平野西部の佐賀平野は、もともと弥生時代中期の青銅器出土数が玄海灘沿岸地域に比較して少ないが、この地域では、青銅器の量的需要を満たすために、青銅器の独自生産を進めたと考えた。

### 第3節 青銅器生産と渡来人

北部九州の弥生遺跡で渡来人の痕跡が顕著な時期は、弥生時代前期末であるが、その段階では青銅器生産と渡来人が直接結び付くことはなかった。しかし次の中期前半にはいると、特に佐賀平野において、渡来系集落と青銅器生産の接点が見えてきた。I期の初期鑄型や擬朝鮮系無文土器に注目し、それらが集中する佐賀平野の分析を行なって、青銅器生産開始と渡来系集落の関わりを考察した。

有力集落・特定集団が地域社会の盟主として政治的に飛躍する弥生時代中期前半は、青銅器が政治的・宗教的権威の象徴物になっていたが、その青銅器を入手するために、工人そのものを招来し、生産することによってその需要を満たそうとする動きが、佐賀平野で顕著に見られる。その背景に、佐賀平野に顕著に残る擬朝鮮系無文土器を持つ渡来人集団の存在に注目してみた。渡来系集落は有力集団によって招来された工人の活動拠点となり、そのため、渡来系集落の集中する佐賀平野は青銅器生産の拠点となり得たと解釈した。

#### 第4節 青銅製鉞

日本出土の工具のひとつである青銅製鉞に関して、その系譜・機能等を総合的に論じた。

日本国内では青銅製鉞が16例、その鋳型が4例発見されているが、まずその法量・形態・所属時期・出土状況などの基礎的な分析作業を行ない、日本における青銅製鉞の実態を把握するとともに、東アジア各地域の青銅製鉞との比較の中で、日本出土の青銅製鉞の特性を見ていった。

日本出土の青銅製鉞の系譜は、従来指摘されていたように直接、長江流域に求めるのではなく、華北-朝鮮半島経由説を提唱した。その機能は、使用による研ぎ減りが右側刃部で進んでいる使用痕跡や基部に抉りの入る着装痕跡の観察から、一般的に言われている「はつる」用法ではなく、「切出す」用法を重視した。また、残存部位が少ないことや通常的生活遺構からの出土が多いことから、他の青銅器に比較して実用性が高いことを検証した。

#### 第5節 広形銅矛製作の研究

青銅器文化導入後、青銅器大型化に伴う製作技術は日本独自に発達する。大型青銅器を鋳造するための連結式鋳型について、それを用いて製作された痕跡を示す広形銅矛の分析を中心に考察を加えた。

通常の武器形青銅器の鋳型は、対になる二個体を合わせて用いるが、広形銅矛では、片面をさらに複数に分割し、それを連結させる鋳型（連結式鋳型）の存在がわかっている。広形銅矛の中には、連結式鋳型の接合痕跡を残すものがある。筆者はその痕跡に着目し、合計20例の製品についての観察報告と検討を行なった。

継ぎ目の位置やその状態を観察の焦点として、隙間に湯がはみ出す「隙間型」、鋳型面が上下に段をなす「段違い型」、左右にずれる「横ずれ型」の3種類に接合痕跡を分類し、それが生じるメカニズムを論じた。

接合部位の検討から、広形銅矛を作成するには幾つかのルールがあることもわかった。

最も長い石材は基部側に用いている。そして、その長さはどのように短くても関以下にはならない。これは中子の固定と関係すると考えられる。また、耳を右側にした状態のA面側が、反対のB面側よりも接合部位が鋒側にならないことから、A面側が優先製作されたこともわかった。また、連結式鋳型の技術は、一部の広形銅戈製造にも応用されていたこともわかった。

青銅器の大型化は、倭で開発された独自の鋳造技術の裏づけがあったことに注目した。

#### 第6節 天神浦出土銅矛の研究

中広形銅矛の分布が際立つ筑後地方において、18本もの銅矛を出土したと伝えられる広川町天神浦遺跡は、その出土数が突出した存在であったが、新たな文字資料の発見により、18本というのは、近くの田代堤出土の5本を加えたもので、もともと一括出土した分は、13本であったことを突き止めた。そして、天神浦遺跡出土銅矛を追跡調査することにより、

同形式の中広形銅矛の新たな資料の掘り起しと、既に知られている資料の再点検を行い、天神浦遺跡出土銅矛が筑後地方の青銅器文化に占める位置を明らかにした。

## 第7節 筑後青銅器文化の研究

筑後地方は筑紫平野東部地域にあり、弥生時代全体を通して、北部九州の中で玄海灘沿岸地域とは違った青銅器文化が見られる。弥生時代中期の細形青銅器段階では、一部で既に青銅器生産が始まり、その先進性が認められる。中細形段階では、引き続き青銅器生産の拠点となるが、その製品自体は少なく、やや低調な内容となる。弥生時代後期に入った中広形段階では、広川町天神浦遺跡に見られるように、銅矛を中心とした各器種の量が、際立って多くなる。広形段階では、銅矛が極端に少なくなる。銅戈が他地域に比較して相対的に多くなる。その原因については、祭式の変化などが考えられるが、今後の課題として残した。各時代の青銅器を通して、時期ごとに筑後地方の青銅器文化の特徴を見た。

## 第5章 弥生集落・墓制の研究

### 第1節 周溝状遺構の研究

北部九州を中心とした弥生集落に見られる周溝状遺構を、総合的に論じた研究である。調査報告書などの個別の記述や個々の解釈を整理するとともに、160遺跡 340遺構例を対象にして、遺構の集成と分析を行い、地域ごとにその様相を述べた。

周溝状遺構は、弥生時代中期初頭に筑紫平野北部で出現し、そこから各地域に伝播して、古墳時代前期初頭にはすべての地域で消滅する。その段階を大きく5期に区分し、それぞれの時期に各地でどのような形状を持ち、集落とはどういう関係にあったのかを系統的に述べた。

周溝状遺構の機能がいちばんの関心事であるが、集落の中にあつて墓地の中にはないという点や、集落の広場や集落の離れの空間にあるという点、また住居跡に対応したあり方をした点など、集落・住居で執り行われる祭祀に関係が深いものと考えた。

### 第2節 北部九州弥生墓制の研究

九州の弥生墓制に見られる他の墓より優越した副葬品を持った一群の甕棺墓・土壌墓群の被葬者集団の性格を検討し、従来から言われているような有力血縁集団ではないという観点から論じた。須玖岡本遺跡、三雲南小路遺跡、井原鍵溝遺跡などの「王墓」は別として、吉武高木遺跡の副葬品を持った木棺墓・甕棺墓の一群や吉野ヶ里遺跡の墳丘墓のようなものを、特定有力家族、あるいは「王墓」と表現することを批判し、個々の遺構の時期が近接して、ほとんど年齢差がない集団と判断し、被葬者を家族ではなく、年齢階梯集団であったと考えた。

また、弥生時代墳墓の区画を論じる中で、それがその後の古墳に、どのように発展した



のかも考察した。北部九州の定型化する以前の古墳には、前方部的な造り出しを持つもの、陸橋で溝を越えるものが多いので、それらは弥生時代以来の弥生墳墓における区画と、その入口の延長であるというとらえ方をして、根本的に前方後円墳と異なる点を主張し、そうした北部九州の伝統的な古墳群に、三角縁神獣鏡のようなヤマト王権とのつながりを象徴するものが入っているところに、北部九州の豪族の特殊性があると考えた。

### 第3節 小都市とその周辺の弥生文化

全文の最後になるが、筆者のフィールドとする筑紫平野北岸の小都市とその周辺の弥生時代における、いくつかの個別的研究をまとめたものである。

「1、弥生時代の自然環境と集落立地」では、植物・動物遺体の科学的分析成果を基に自然環境を復元し、弥生時代人がその環境の中で、どういう集落経営を行ったのか論じた。

「2、絵画甕棺の調査」は、今までに、1万基以上調査されたと考えられる北部九州の甕棺の中でも、わずか4例しかない具象画のひとつである、ハサコの宮遺跡出土甕棺を細かく分析して、その絵の技術や系譜・埋葬における意味などを考察した。

「3、青銅器・鉄器の出現と普及」では、筑後地方の中でも、充実した内容を持つ市内とその周辺の青銅器・鉄器を集成・分析し、筑紫平野にありながら、玄海灘沿岸の青銅器文化先進地域とのつながりの深い小都市周辺の金属器文化を考察した。

「4、土木建築技術の成熟」は、近年、発掘調査によって資料が増加した集落遺跡に見られる住居や橋などの構造物をもとに、当時の土木・建築技術を論じ、その労働供与の問題から、背景にある弥生社会の集団関係について論じた。

「5、農耕村落の展開」は、弥生時代中期前葉以後の集落論である。第1章で述べた弥生時代前期から中期初頭にかけての三国丘陵集落論の続きになる。丘陵南側の小郡台地などへ移動した集団と三国丘陵に残った集団の動向を当時の弥生社会の動きとともに解説した。

本論は、個々の論文を「北部九州弥生社会の研究」として、一貫性を持つひとつの論文にまとめたものである。研究の基本的な姿勢は、遺跡・遺構・遺物などの研究資料を実見し、実測する現場主義である。本論の個々の研究課題は、現場主義による、資料の分析から構成されている。

本論の中でも特に力点を置いたのは、朝鮮系無文土器の研究である。渡来人集団と青銅器生産開始の問題などは、筆者のオリジナルのものであって、これからの弥生時代研究に寄与できるものと考えている。

今後、個別の論考を修正・補足しつつ、将来的な学問体系化に向かって努力したい。